# YKK 市川寮/「風の門」YKK Ichikawa Dormitory

# Courtyard and greenery on a slope connected by a transparent wing

所在地：千葉県市川市

用途：独身寮（24戸）、 家族寮（3戸）

構造設計：TIS&PARTNERS

設備設計：遠藤二夫、若松宏

施工：鹿島建設

敷地面積：1600.31

建築面積：547.23

延べ床面積：1370.65

構造規模：RC柱梁構造、壁構造3階建

竣工：1987.11

多義的な、あるいはＩＮＣＬＵＳＩＶＥな全体をめざして

ＹＫＫ市川寮はＪＲ総武線市川駅の北約１キロメートルにあり、市川市を東西に走る標高差約１０メートルの段丘の法面とその南側が敷地となっている。このあたりは第一種住居専用地域、風致地区で、閑静な住宅地である。敷地の北側の法面は豊かな木々に覆われ、比較的乾燥としたイメージを受ける総武線沿線の街のなかで唯一潤いを感ずる市川の印象にこの法面を覆う帯状緑地が大きな貢献をしているようである。この施設に求められた用途は吉田工業株式会社のための独身寮（２７室）とそれらの共用諸室（食堂、厨房、風呂）および世帯向けのアパート（２戸）、それに住み込み管理人用のアパートであった。

風の門

最初にこの敷地を訪れたのは三年前の秋であった。敷地の北側の法面の深々とした木々が初秋の光を受けて穏やかに風にゆれていた。この樹林帯の幅は高々１５メートルほどにすぎないのだが、斜面の効果もあって深い森の端を見ているような錯覚に陥る（それは谷と丘が入り組んだ東京で見掛ける残された緑と共通する特徴を示ししている）。この緑は私的な所有物であるが、市川市を東西に縦走する緑地帯の一部であり、ある意味で公共的な性格を持った、いわば市川市民の財産でもある。従って、道路からこの緑への視線を新しい施設で塞いでしまうのではなく、道と樹林の間に視覚的な通路を設定すること、これがこの計画に我々が設定した第一の目標であった。そのために中庭を中央に取り、その西側に寮室棟を、東側に厨房と車庫、そしてそれに続けて南側に家族用アパート棟を、それらの北側に崖を背にして東西の棟を結びつけるように共用棟を置いている。その際、中央に置かれた共用棟は可能な限り透過性のあるものにし、道から中庭を通して後ろの樹林まで視線が通るようにしている。そのため共用棟は空間の利用効率と言う点からすれば幾分無駄が多くなるが、これは企業の利益の社会還元の一つの型であろうと考えた。従って、全体の配置構成は中庭型であると同時に通り型でもあるという両義性をもっている。２階の食堂や外部テラス、三階の会議室、寮室棟の廊下に沿って設けられた各階のラウンジ、家族アパートの外部階段や居間は中庭の廻りに配され、様々な開口を持ち相互に見合い、様々な気配を感じられるという点で中庭型の配置の特性を活かすようにしている。一方、アプローチ側から見れば、門前町の家並の向こうに楼門が聳え、それを通して境内の樹木が伺えるという風景を連想させる。この構成を強調するように各棟は形態的な分節がなされているだけでなく構造的にも寮室棟と家族アパートは壁構造とし、共用棟はラーメン構造と使い分けている。また、東側の家族アパートのピロティ下の壁は１／１０だけ傾いており、奥に向かうパースを強調している。この道は「奥」への道であり、正面の共用棟は自然と人工を繋ぐ象徴的な門である。それは風が吹き抜けていく「風の門」なのである。

「構え」

門、特に楼門とよばれる範疇の建築は非常に魅力的な建物である。それは付属屋にすぎないが、閾であって建物全体を表徴し、通り抜ける建物であって目的を持たず、いわば虚空を蔵している。にもかかわらず、日本の近代建築を眺めていると、大邸宅等を除いて、門は特に公共的な建物では殆ど作られることがなくなってしまった。門というボキャブラリーをなくしたということは、「構え」という意識を希薄にしたということの象徴的なできごとなのである。「構え」とは建築と都市を媒介する概念である。もし、この計画で「構え」を問題とするならば、それは住宅地におけるイスティテューショナルな施設の「構え」はいかなるものかということになろうか。この建物は道路側の構えでは左右非相称であり、東西の隣接する家並のコンテクストに協調した住宅地的な表情をもっている。それに対して中庭の奥に控える共用棟はしっかりした軒線と基壇をもった古典的な構成をもちモニュメンタルな構えをもっている。このドメスティックとモニュメンタルという層状の二段構えが一つの回答なのである。

モダニズムのイコン

全体の単純で直行座標系を主体とした枠組みのなかに二つの仕掛けがしくまれている。一つはモダニズムのイコンを中心としたエレメントの布置であり、もうひとつは外気との接触面を長くするような構成である。ここでいうエレメントとは、寮室に沿って設けられたコロネード、飛び込み台のように空中に踊り出た非常階段、ガラススクリーンが付けられた家族アパートの外階段、中庭からテラスに上がるパースのついた階段、テラスから３階に空中をよぎる階段、円形の一部を使った寮の主階段、そしてテラスに立てられた卍型の開口を持つ壁、食堂に置かれた空調吹き出し口と配膳口の目隠しを兼ねた巨大家具、白い丸柱などである。これらは形態あるいは位置関係（あるものは主座標系に対して１／１０の角度でおかれ）によって自立性を獲得し、単純な枠組みのなかに場を作りだし、「都市」を作り出している。またいくつかのエレメントは、オランダ構成主義やコルビジェの作品を連想させ、これらの建築家に対するオマージュとなっている。とくに二階テラスの卍型の開口はラ・トゥーレットのペントハウスの開口の写しでありコル生誕１００年を記念している。かつて形態のイコン性を拒否したモダニズムは抽象的な構成に興味をもったが、それ自身がいまやある種のイコン性を帯びるにいたっている。この現在のモダニズムがもっている抽象性とイコン性の両義性は可能性をはらんでいるように思える。近代建築的枠組みのなかに組み込まれたモダニズムのイコンは、全体と部分が相同の構造を持つがゆえに、部分はその独自性を主張すると同時に、全体構成の一要素となりうるのではないか。例えば、壁に塗られた三原色は壁を分節するとともににモンドリアン的コンポジションとして自立したエレメントとして意識されている。食堂の巨大家具はこのコンポジションの三次元的展開（青い家具と赤、黄の壁）であるだけでなく、それはこの内部空間の構成の一要素であるとともに、オブジェとして建物のようにも見え、この透けた空間の内外を逆転する幻景を誘うかもしれない。この内外逆転は共用棟の単純な柱梁の架構のなかに複雑に組み込まれたガラス面によっても増加されている。近代建築には表面積を最小にしようという傾向があり、それは経済性と結びつきいまやインターナショナルスタイルの主流といってもよいが、初期近代建築やオランダの建築（例えばＡ・ヴァン・アイクやヘルツベルハー）には全く逆に表面積を増やし外気との接触性が大きい建築がある。単純な輪郭のなかに仕掛けられた様々なガラス面や打ち放しの壁は自然と親和的にし、視覚の楽しみを誘い（視線がいくつかの空間を縫い合わせてゆく）、建物の表情に含みと奥行きをもたせる。